Japanese Society for Dance Research

ニューズレター

第5号

目次

特集 この時代におけるダンスのチカラ	
「いま、伝統が輝きはじめてきたような…予感がします!」 丸茂美惠子(祐佳)	2
あの人にこの質問を	
西形節子さん (日本舞踊評論家・舞踊学会名誉会員)	
インタビュー・構成 弓削田綾乃 協力 仙田麻菜	3
私の研究テーマ	
富田大介 (大阪大学大学院国際公共政策研究科 稲盛財団寄附講座 特任助教)	8
酒向治子 (岡山大学大学院准教授)	_
「自由になる」身体教育の探究	9
第65回舞踊学会大会	11
事務局便り	12
掲示板	13
編集後記	13

特集

この時代における ダンスのチカラ

> 丸茂 美惠子(祐佳) (日本大学教授)



I am here because I was saved by sport. It taught me the values that matter in life.

2013年9月、IOC総会における2020年オリンピック・パラリンピック東京招致に向けた、佐藤真海選手のプレゼンテーションは世界の人々を感動の渦に巻き込みました。そこには"スポーツの真の力"が切々たる想いで語られていたのです。

私がニューズレター担当の大貫秀明理事よりこの原稿を依頼されたのが、8月上旬でした。特集「この時代におけるダンスのチカラ」、正直申してとてもむずかしいテーマだと思いました。というのも、創刊号の「創刊の辞」に先んじて東北地方太平洋沖地震災害で被災された皆様への哀悼の意が表されています。発行もちょうどその年の11月です。つまり、「この時代」の解釈にとまどいを感じたからです。私は大きな災害に出会ったことはありません。ですから、私などが罹災された人々の心をどれほど理解できるのでしょうか…。ゆえに「この時代」を安易な気持ちで捉えることはできないと考えています。

そういう折も折、佐藤選手のスピーチが世界を駆け巡りました。なぜ、私がここで東京オリンピック

招致を取り上げるのかと言えば、東京都は石原慎太郎前都知事の時からオリンピック・パラリンピックの招致活動を実施し、その一環に東京の持つ文化の魅力を発信していく「東京文化発信プロジェクト」を展開しています。私はその活動のひとつ「東京発・伝統WA感動」に外部の立場で少し関わらせていただいております。ジャンルは能楽、日本舞踊、邦楽、落語、演芸、なかには百人一首などと幅広く、多彩なプログラムが企画されますが、それらの多くが一般の観客にも伝統の良さと面白さとを再認識させてくれる機会となっています。

これまでのすべてを紹介できないのが残念ですが、今年10月5日、東京文化会館で上演された「音の息吹き 冴え渡る息と響き、躍動する身体-日本音楽とダンスの競演」(織田紘二監修)が、まさにそれです。プログラムは第一部は音の響きを古代・中世・近世と時間軸でつないだ「雅楽/管弦 舞風神」、「能楽/素囃子 獅子」、「尺八 泰山」、第二部は「鬼の花」(藤舎名生作曲、森山開次振付、勅使河原茜美術)、「幽寂の舞」(新実徳英作曲、平山素子振付)で空間軸で捉えた現代の融合と位置づけられるでしょうか。第二部における日本音楽とダン

スのコラボレーションは、前者は森山(ダンス)と 名生(笛)が風神雷神の対決をイメージさせ、こと に竹と紅葉のオブジェをバックに森山の鬼気迫る シーンが強烈なインパクトをもたらし、後者は尺八 (三橋貴風)、十七絃(沢井一恵)等の音楽に平山 と加賀谷香の女性二人が、"悠々と吹き上がる生命 の息吹"にたとえた巨大な芋虫のごとき白い風船様 の薄物を上手く活用しながら静謐な世界を醸し出 し、双方とも日本の伝統の輝きを体感させる舞台で した。

じつは私はその二日前、同じ会場で、「日本舞踊とオーケストラー新たなる伝統へ向けてー」(花柳壽輔構成・演出)を鑑賞してきたばかりでした。これも東京都主催(「東京TRAD」期間の中心事業)です。昨年、「牧神の午後」、「ボレロ」などバレエ音楽を日本舞踊で踊って話題をさらった企画の、言うなれば第二弾にあたります。昨年に続き、満席の盛況ぶりで、今年のメインは坂東玉三郎を迎えてドビュッシー作曲「プレリュード(沈める寺)」(壽輔振付、千住博美術)。「オンディーヌ」をヒントに旅人(壽輔)が水の精(玉三郎)に魅せられ、水の中に入水するという物語を幻想的に繰り広げました。

このように和と洋のコラボによる二公演を続けて 鑑賞し、私自身の中で、伝統が輝きはじめてきたよ うな予感がしました。 ですが、日本舞踊の立場の人間として決して忘れてはならないのは、昨年のプログラムにみるように、花柳壽輔氏のご挨拶「近年日本舞踊は非常に深刻な状況です。…」(「日本舞踊×オーケストラー伝統の競演ー」)と書かれた危惧への突破口として、まず多くの方、若い方に日本舞踊に関心を持っていただきたいという意図があることです。この公演に出演した何十人という若手舞踊家は男女を問わず、すべてと言ってよいほど幼少から正統的な日本舞踊の稽古を積んできた人たちです。

たまたま、今年は「東京文化発信プロジェクト」の「キッズ伝統芸能体験」にもご縁ができ、お試し体験や開講式にも行ってまいりました。この事業のキーワードは「本物」です。能楽、長唄、三曲、日本舞踊の4分野17コースがあり、応募者は900人を超えたとか。抽選で受講が叶った子どもたちはみんなお行儀がよく、とても活き活きしていました。一流の先生に学んだ子どもたちが"伝統のなかで培われ、磨かれてきた言葉や音色、形や心を全身で感じ、表現する力をつける"ことを願い、伝統芸能のみならず、未来の新しい文化の理解者として育っていくことがこの事業の狙いです。

きっと彼らはまた、次代の本物の文化のチカラとなってくれるのでしょう。私たちには、それらを導いていく大事な使命があると考えます。

あの人にこの質問を 第5回

西形節子さん

(日本舞踊評論家・舞踊学会名誉会員)

インタビュー・構成 弓削田綾乃 協力 仙田麻菜



一一西形先生は、若い頃から日本舞踊家として活躍され、また研究者としても貴重なご研究を発表されてこられました。本日は、先生にとっての日本舞踊というテーマで、実践とご研究の両面で、どのよう

に関わっていらしたかをお聞かせ願えればと思いま す。まずは、日本舞踊との出会いからお願いいたし ます。 西形:物心ついたときから・・・習い事は六つの六月六日から始めるということで、いわゆる両親の強制だったんですね。花柳流の踊りのお師匠さんと、長唄のお師匠さんが、家までお出稽古に来てくださっていたんです。私は商人の娘に育ったものですから。親たちが道楽でやっていたのが、なんとなく気がついたら自分もやっていたという感じなんです。小学校へ行くようになってからは、学校のそばの踊りと長唄のお稽古に寄って来いと言うんですね。学校から帰ってきて、「お勉強したの?」と言われた事はないのに、「お稽古行ってきたの?」とは言われたくらい、お稽古事が当たり前の毎日でした。

それが戦争で中断してしまって。私は疎開して鎌 倉に行ったけれど、学徒動員で勉強ができない年代 でしたからね。疎開した学校というのが、今の白百 合なんですが、終戦の年に高等女学校の4年生でし た。それは、今でいうと高校1年生なんですね。そ の頃は、毎日家から工場へ通って、飛行機のメー ターづくりなどをさせられて。家に帰る途中で機銃 掃射にあったりという、そういう時代でした。だか ら、8月15日に戦争が終わって、物事や考え方などが 完全にひっくり返ったようでした。私はちょうど16 歳だったかな。その年齢でそういう状況におかれた ということは、とても衝撃的だったんです。それ で、女学校は5年制でしたから、今でいう高2で卒 業させられてしまったんです。本当に今とは、女性 の置かれている立場が全く違っていました。卒業し てからは、毎日毎日お茶、お花、和裁洋裁などの習 い事が、一週間ぎっしりあって、花嫁修業してお嫁 にいくコースに乗せられそうになったんです。そん なわけで、2年ほどロスをいたしました。

平和な日本になって、演劇――実は女優になりたいと思いました。しかし、父が反対するものですから、なんとか誤魔化して4年制大学の演劇科のあるところを探したんです。そうしたら、その当時は、早稲田と日大しかありませんでした。しかし私は高2で卒業してしまったわけですから、入学資格を得るために、もう一度、白百合に戻って高3をやり直しました。片瀬の白百合から早稲田大学に入ったのは、私が初めてでしたね。

入学したての頃は、まだ学ランを着て、学帽を

被っているような男子学生ばかりでした。食べ物も着るものもない時代でしたから、古いカーテンを外して、自分で縫ってスカートを作ったりしていました。私は踊りをやっていて、たまたま鎌倉へ疎開していたこともあり、着物が残っていたんです。それで、やむを得ず袴だけを作って、着物と袴で通っていました。苦肉の策だったんですよ。もともと女子学生が少ないなかで、目立ってしまっていましたね。

早稲田では、劇団に入ったこともありました。なにしろ女子学生が少ないですからね。入った途端に、最上級生の卒業公演の芝居に駆り出されていました。それから、早稲田の英文学者の倉橋健先生が訳された、アメリカの劇作家ポール・グリーンご本人がみえたときも、大学として演劇をすることになって、引っぱり出されました。大学では、研究よりも、大隈講堂にいることの方が多かったですね。

日本舞踊の実技の方は、ずっと続けていました。 東京新聞の舞踊コンクールを受けて入選したんです が、その入選者たちで、「みやこ会」という会をつ くったんです。そのあとには、「舞踊劇場」とい う、日本舞踊の創作活動をするグループができて、 そこにも入って活動していました。日本舞踊のグ ループ活動というのは、戦後の機運なのね。その時 期は、テレビもまだ広まっていませんし、ある意味 でバレエ、そして日本舞踊に子どもたちが集中して いました。今と違って、そういうものに飢えていた のかな。

いよいよ卒業論文を書かなきゃという段階になって、やっぱり、子どものうちから続けてきた踊りが一番身近なところにあったので、変化舞踊をテーマにとりあげたんです。その指導教授が、河竹繁俊先生・・先日お亡くなりになった河竹登志夫先生のお父さま。登志夫さんは、私が入った時に最上級生にいらした先輩なので、古いお付き合いでした。繁俊先生は、もう歴史的な先生ですけれど、私は先生方には恵まれていましたね。副査についていただいたのは、美術で有名な田中良先生で、ちょうど早稲田へ教えにいらしていたの。その頃の早稲田には、坪内士行先生もいらしたし。そういう先生方には恵まれていたのに、勉強しなかったわね。

ちょうど卒業した頃、昭和29年に共立女子大学の

文芸学部が創立されました。新関良三先生が、遠藤 慎吾先生と杉山誠先生を東大から連れていらして、 家政学部しかなかったところに文芸学部をつくった んです。河竹先生と新関先生がお親しかったもので すから、「お前、早稲田にいても男ばっかりだから 共立女子大に行け」と言われて、1年間、助手のよ うな研究生として、杉山先生の研究室にいました。 新関先生は、ギリシャ・ローマ演劇の権威で、杉山 先生は、俳優座研究所の主事をしていらして歌舞伎 にもお詳しい方でした。そうしたら、新関先生が 「わしは今、大学院で教えているから、お前も大学 院に行ってこい」と言われて。「はい」って、早稲 田の大学院に行きました。でもね、本当は意識が低 かったんですよ。今考えたら勿体ないことをしたと 思うんですけれどね。でも、学者になろう、学問と してこれを勉強しよう、なんて気持ちはさらさらな かったんです。その頃はまだ、どちらかといえば実 技の世界に目が奪われていたんですね。結構、舞台 でも踊っていたものですから。その頃、洋舞の方た ちとも一緒に、恥ずかしながらロックにあわせて、 タイツ姿で踊ったこともあるんですよ。それくら い、実技の方に夢中だったんです。

一一少し話が戻ってしまいますが、先生は大学に入った頃からお弟子さんの指導もされていたのですよね。

西形:大学に入った時点で研究所、いわゆる自分のお稽古場を持ったんです。そこは、子どもたちが大勢いたものだから、昼間は大学に行って、帰ってからお稽古をしていました。お稽古場が鎌倉で、往復2時間かけて通っていましたから、なるべく早い時間の授業をとっていたんです。今と違って地下鉄もなく、路面電車ですよ、早稲田へ通うのに。飯田橋からコトコト路面電車で通っていました。高田馬場からの大学バスはありましたけれどね。バスの運賃が、往復15円の時代でした。

――では、研究に戻りまして、早稲田大学大学院からのご研究についてお聞かせいただけますか。

西形:修士論文は、舞曲扇林の研究をしました。先 日、早稲田からその修論と卒論が出てきたので、恥 かきついでに本にまとめておこうと思って、今やっ ています。あとは、最近書いたものと、それから舞 踊劇場も記録に残しておきたいということで、人に 手伝ってもらいながらまとめています。これがまと まったら、戦後史の、ちょっとだけ詳しいのが載る と思います。だいたい戦前までは、一生懸命資料を 集めたんです。戦前は、どうしても戦争があった し、その前に関東大震災があったでしょ。資料を集 めるのがとても大変でした。残っているプログラム をあちこちから貰ったり、遺族のところに行って、 資料を見せていただいたり。やっとこさっとこ作り 上げたのが、『近代日本舞踊史』(2008年、演劇出 版社)なんですよ。あと私は、文化庁から依頼され た、戦後の50年史も書きました。ただ、すっと流し たものなので、本当は戦後史の資料を集めてまとめ ておかなければいけないんですけれどね。それは皆 さん、次の世代の方々によろしくお願いいたしま す。

本当は、修士論文を出してからは、久しく学校から遠ざかっていたんです。主人が、私が42歳の時に亡くなりました。それまでも実技の方は続けていたんですけれどね。「藤間すみれ」という名前で、鎌倉の舞踊研究所を続けて、年1回ぐらい自分の会やリサイタルなどを続けていました。私が大学に入った年の昭和25年(1950年)から、昭和55年(1980年)まで、ちょうど30年間続けたんですね。終わりの10年ほど遡る頃から、共立女子大学に出講するようになっていました。その頃、主人が亡くなってどうしようかと思っていた時期で、実技を教えるだけではなかなか自分の穴が埋まらなくなっていたんです。

それで、「あ、また学生に戻ろう」と考えました。修論で副査をしていただいた郡司正勝先生が、早稲田の主任教授でいらっしゃいました。その頃はもう、河竹繁俊先生はいらっしゃらないし、杉山誠先生は60歳で亡くなられていました。ですから、郡司先生の教室の門を叩いたんです。そうしたら、古井戸さんが学生でいらっしゃいましたよ。それから10年ほどして、共立で教えたことやなにやかやをまとめたのが、『日本舞踊の研究』(1980年、南窓社)という本です。あれが最初の本でした。郡司先

生と河竹先生が序文を書いてくださったのですが、 古井戸さんに言わせると、「このお二人から序文を もらう人なんて誰もいない、一緒に書いてくださる ことはめったにないんだ」と。踊りの実技と研究と いう、二足の草鞋を履いている方は、その頃の日本 舞踊界ではどなたもいらっしゃらなかったんです ね。この本を出したのがきっかけで、「舞踊家を辞 めます」と言って、けじめをつけました。「これか らは、拝見する方にまわります」ということで。昭 和55年(1980年)に、当時あった東横ホールという 劇場で、最後の会をにぎやかにやりました。そんな わけで、実技からは遠ざかっておりましたが、平成 19年(2012年)に、歌舞伎座が取り壊される前の記 念の公演で、清元「北州」を踊らせていただきまし た。(右下写真)



(清元「北州」平成19年6月29日歌舞伎座)

学会の論文では、「日本舞踊の後見について」(1976年『演劇研究』)というのが一番早かったですね。郡司先生に、それだけは褒められたんですよ。本当に厳しい方でした。あとは、『邦楽と舞踊』に連載していたものをまとめた、『日本舞踊の心』(2002~2003年、演劇出版社)が5巻続きで出ていますが、あれはとても勉強になりました。連載を始めたのが40代だから、トータルすると20年くらい続いたんですね。目代清さんと、3ケ月交代でやっていたんです。だから、目代さんの出した本と、私のとは中身が全く違っているんですよ。私は私流。目代さんは目代さん流。全然違っていて、おもしろかったですね。

――西形先生は、歌舞伎座のイヤホンガイドも長年

つとめられていました。

西形:実技をやめる数年前の昭和51年に、歌舞伎座 のイヤホンガイドがスタートしたんです。イヤホン ガイド自体、全く五里霧中でした。誰も教えてくれ ないんですよ、その当時は。「お芝居がお好きで しょうか」と言われて、まさにボランティアから始 まったんです。今はちゃんと原稿料をくれますけれ ど。イヤホンガイドの機械の貸し出しも、商売にな るのかどうかも分からない代物でした。でも今は、 劇場によっては字幕もあるくらいですからね。最初 の頃は、イヤホンガイドの担当が5~6人しかいな くて、新橋演舞場と歌舞伎座と掛け持ちしながら、 一人が2~3本抱えるような状態だったんです。歌 舞伎座だと、千秋楽が25日で、翌月の1日には次の 初日があくんですよ。舞台稽古なんて、その間に1回 くらいしかやらない。イヤホンガイドの原稿も、役 者によって演技が違うから、ただ台本をみているだ けではわからない。本番通りの稽古を見てすぐ(翌 日が初日ですから)原稿を書いて、録音するという ことをしていました。そういう訳で、これまでの原 稿が、この裏側にたまっているのよ。(西形先生の ご自宅で、細かく書き込まれた手書きの原稿『義経 千本桜 (先代の中村勘三郎主演) 』を見せていただ きながら)これを1日でやらなければならないか ら、大変なんです。だいたい徹夜になりますよ。だ から肉体的にね、年をとってくると大変なんです よ。原稿は自分でないと読めないんですが、これを 全部整理するとなると、もう大仕事ですよね。どな たかやってくださればいいんですけれど。自分でア イウエオ順にまとめた目録はあるんです。とにか く、これも35年、続けました。

――先生は、日本舞踊に対して、内からの目と外からの目という両方の目をお持ちなのが、大変稀有だと思うのですが。

西形: まあ、そのへんが、今までなかった形なのかなと思います。いわゆる資料をもとにした理論的な研究と、実践的な研究と。私はできるだけ、実践と学術とを結びつけられればいいなと思っているんです。卒論も修論も日本舞踊で、そこからスタートした訳ですが、途中でちょっと途切れてしまいまし

た。でも途中からまた改めて、学問的裏付けで今の 日本舞踊が盛んになってほしいという意味も込め て、少しでもお役に立てればと思って書いてきまし た。

今、心配なのは、日本舞踊のアイデンティティが 危ういということです。どういうかたちで生き残っ ていけるかということを、もっと舞踊家にも自覚し てほしいと思うんです。何故かと言うと、歌舞伎も 文楽も能・狂言も雅楽も、伝統芸能として国の応援 がありますよね。それに比べて、日本舞踊の立場と いったら、特に応援はないんです。それはなぜかと 言うと、歌舞伎は一つの興業として成り立っても難 しい。いわゆる篤志家の志によって支えられている だけのような気がするんです。だから、次の世代の 方々が政府に働きかけるなり、家庭の中に定着させ て「日本文化としても身近な存在なんですよ」とい うことを認識していただけるように働きかけていた だきたいと思います。

そもそも「日本舞踊」という言葉自体を文化庁が 認めてくれなくて、喧嘩したこともあるんですよ。 「日本舞踊」というと、日本の全部の舞踊を指すこ とになるという考え方なんです。だから、日本舞踊 の舞踊家たちは、「歌舞伎舞踊」という名称で重要 文化財保持者になっています。それが私は不本意な んです。歌舞伎は歌舞伎で、日本舞踊は一つの舞台 芸術として独立してから100年以上の歴史がありま す。せめて、国で日本舞踊をとりあげてくれない と、だんだん人々の認識から日本舞踊がなくなって しまう。「歌舞伎舞踊」として、歌舞伎の中に吸収 されてしまうでしょ。日本舞踊は、歌舞伎から独立 した舞台芸術として、洋舞などの刺激も受けながら 伝統を育ててきたんです。伝統は日々新しくなり、 次の世代に伝えられていくものだから、生きている 訳ですよね。素踊りや創作ものなどもたくさんある わけです。そういったものを、なかなか世間が認め てくださらないし、興業として成り立っていないと いうことに、非常に危機感を感じています。

たとえば、学校教育でなら、舞踊でなくても日本の伝統文化を学ぶ礼儀作法の時間ということでもいいと思うんです。日本舞踊を一つやれば、それこそ 華道も茶道も、日本の音楽も、そういうものが全て 含められますよね。いわゆるこれは、日本人の一つの教養として成り立つ形だと思います。あとは、セラピーとして、医療と結びつく可能性もあると考えています。そんなふうに、日本舞踊は非常にとっつきやすい伝統文化です。歌舞伎はやりたいと思っても誰でもできるわけではないですよね。でも、そこから輩出された日本舞踊は、誰でも実際に体験できるものです。私は、それが日本舞踊の特色だと思いますし、そういう意味でも、実技と理論が同時に進行していってほしいと思っています。

これだけ素晴らしい人たちが関わってきて、今日まで育ってきたものですから、学会として是非応援していただきたい。次の世代の方々には日本舞踊の灯を絶やさないよう、つとめていただきたい。それがお願いです。

――最後に、若い人へのメッセージをいただけます か。

西形:何か一つのことをやるのでしたら、若い時か ら続けてお勉強なさい、と。私は、おかげさまで、 とてもいい先生方に恵まれました。だから幸せな時 間を過ごせたんですが、それでもやっぱり、もっと 若い時にいろいろなことを吸収しておけば良かった と思うことが時々あります。若い時の空白の時期と いうのが、とても惜しまれるんです。だから皆さ ん、続けるということは、とても大事なことです よ。イヤホンガイドも、いつの間にか35年という月 日が流れましたでしょ。やっぱり続けてきたから皆 さんの中に浸透してきたんですよね。私も、何も分 からないのに、「ともかくこれを解説してくださ い」と言われながら、試行錯誤して・・・それこそ 声の出し方や音程、内容が多すぎないか少なすぎな いかなど、同じ出し物でもいつもお勉強していまし た。舞台の温度を感じながら、お客様の耳障りにな らないように、隣におばさんがいて、こうだよって 言って楽しく聴かせてくれる…それが障りにならな いように入ってくるのが、本当のいいイヤホンガイ ドじゃないかと思うんですよ。ただ、やっぱりそれ も、時間の積み重ねが一つの成果を出してくれるん ですね。

また、何冊かの本を残せたことも、ぽちぽちですけれど、毎月締切りに追われながらやってきたおかげだと思うんです。締切りのない時は自分で締切りをつくることですね。そうするとなにか、きっと良いものがまとまるのではないでしょうか。

それと、ある程度、年をとっても常に好奇心の塊でいたいですね。そうじゃないと、皆から遅れていってしまいますもの。だから、朝起きたときから

好奇心の塊でいたいじゃない。そうすれば、1日が早く過ぎます。私なんか、歳をとっても毎日忙しいですよ。

――長時間にわたって、大変貴重なお話の数々を聞かせていただき、まことにありがとうございました。

私の研究テーマ

富田大介

(大阪大学大学院国際公共政策研究科 稲盛財団寄附講座 特任助教)

「努力というものが能動と受動の間においてそうであったように、習慣もまた意志と自然との 共通の境界すなわち中間項なのである。それは動的中項であり、絶えず移動する境界、感じる とができないほどの細やかさで一方の極から他方の極へと進む境界なのである。」⁽¹⁾

私は「習慣」をテーマにしてきました。「習慣」は、博士論文 ⁽²⁾ を書き終えたいまも私の中で追究されています。それは、舞台出演やワークショップなどの実践活動にも、またテキストの読解を中心とする理論的な研究にも相通じています。

「習慣」は古代より「第二の自然」と呼ばれ、日常では反省意識に上りにくい力ですが、例えば、古典舞踊のような習得に負荷のかかる運動を経験するや意識されやすくなります。私は、習慣化には生命の論理が働いていると考えています。生きるということは、固定すること、過去(類似、記憶)をもとに未来をわが物にすることです――生き物はそのようにして栄養を摂ります。なので、もし「記憶」が「精神」の代名詞だとすると、習慣は精神と身体を切り結ぶ力、その運動のことであり、習慣は自然と意志の動的中項として、生存術から芸術までも通底する行為の理となります。

習慣についてのこうした思考は、私の注意を、芸術としてのダンスには限定されない(一般化された)「ダンス」へと促しました。例えば、フランスの詩人ポール・ヴァレリーは、踊りをたずきに、私たちが行為を秩序づけている時の一般的な理を思惟

し、私たちの生の原理を演繹しました。「(大文字の)ダンス」の表象⁽³⁾、あるいは「水母」のイメージ (⁴⁾…、それらによってヴァレリーは、私たちが今の自分とは違う存在に成りゆく際に自身のうちでおこっていることの本質を掴んでいたのです。

そんな「ダンス」に惹きつけられたのは私だけではありませんでした。ヴァレリーの踊るクラゲは、宇宙をたゆたい、土方巽の思惟にも入り込んでいました。土方の参照の仕方は正鵠を射ており(5)、いかに彼の「舞踏」の表象や「器」のイメージが、ヴァレリーの思惟とつながり得るかを伝えています。「クラゲ」も「器」も畢竟、二人の言葉を借りれば、「メタモルフォーズ」の根拠、私たちの行為が変わってゆけることを保障するもののメタファーなのです。

勿論、こうした思考の向きを「本質主義」と括ってそれと距離をとるのもありですが、実践しながら深く思惟していた者たちなのです。研究者としてはその直観に触れる努力をしても無駄ではないでしょう。実際に、芸術とはまた違う視角から、そうしたメタフィジックな根拠を捉えていた先人もいたのですし。経験を忽せにしない形而上学(「実証的形而

上学」)を自らの哲学としていたアンリ・ベルクソンは、当時の心理学と大脳生理学の事細かな研究から、私たちの行為や方向感覚が形成されてゆく要件を抉出しました。習慣の原理と目されるそれは「運動的な図式」⁽⁶⁾と名づけられますが(周知の通りこの研究はモーリス・メルロ=ポンティに大きな影響を与えることになります)、この図式は、知覚を模倣しながら適切な記憶を体に引き寄せる動的な枠組みとして、「運動とイメージとに共通の環境」、「身体的なものと精神的なものの出会いの場」⁽⁷⁾と纏めることのできる機構です。

さて、以上のように振り返ることで、私の研究が、いまどうして芸術的ダンスの上演だけでなく、 さまざまなワークショップ等の考察に向かっている かが分かります。現代のダンサーの多様な活動を見 るや、その技術は、舞台上での至芸(ファインアー ト)から、生きるに必要な生存のアルスまでをも推移し、劇の場だけでなくさまざまなところで活かされています。異質な存在が異質のままに居ることのできる(それをよしとし得る)共存の態勢、あるいは共通の環境を育んでいます。こうした技術は、「芸術」と言うだけでは惜しいほどに、ダンスの社会的機能を多様化しています。

私は現在、そのような態勢ないしは環境を育む機会を自身でも増やしていっています。さまざまな履歴や背景を持つ人が集合と拡散を繰り広げる踊り場(中間領域)、その固有の運動と思考が交差するランデヴ…⁽⁸⁾。「習慣」をめぐる理論研究の鍵タームが、いま日常の言葉とリンクしながら実践的に開花してきました。

注

- (1) Félix Ravaisson, « De l'habitude », De l'habitude / Métaphysique et morale, Paris : PUF, Quadrige, 1999, p. 139
- (2) 富田大介、『習慣の原理についての一考察 「心体操」の理論的基礎付けに向けて—』、博士論文(2011年3月神戸大学 大学院文化学研究科に提出、同年9月同研究科により受理)
- (3) Paul Valéry, « Philosophie de la danse », OEuvres, tome 1, Paris : Gallimard, « Bibliothèque de la Pléide », 1957, p. 1403
- (4) Paul Valéry, « De la danse », OEuvres, tome 2, Paris : Gallimard, « Bibliothèque de la Pléide », 1960, p. 1173
- (5) 土方巽、「極端な豪奢・土方巽氏インタヴュー」、W-Notation No.2、UPU、1985年、p.7
- (6) この図式は、「空の器 (récipient vide)」と呼ばれもする。Cf. Henri Bergson, *Matière et mémoire*, Paris: PUF, Quadrige, 1999, chapitre II. なお、土方の「(からっぽの)器」については、『土方巽 全集I』pp. 238-239を参照のこと。
- (7) Vladimir Jankélévitch, Henri Bergson, Paris: PUF, Quadrige, 1999, pp. 116-117
- (8) Moving/Thinking/Meeting (MTM): 体を動かしながらちょっと突っ込んで考えてみる会

私の研究テーマ

酒向治子 (岡山大学大学院准教授)

「自由になる」身体教育の探究

私はこれまで主に劇場ダンスとダンス分析法を中心に研究を進めてきました。現在教員養成課程でダンス教育に携わる中で、それらの研究から得られた知見や問いが理論と実践が往還する教育という場において極めて重要な意味をもつことを実感するようになりました。以下では、これまでの研究について現在の問題意識に触れながら簡潔に述べたいと思います。

1. 劇場ダンスの研究 - ポスト表現主義ダンスが、身

体教育の現場に投げかけるもの -

20世紀半ばに西洋の劇場舞踊における革命的変化を 及ぼしたのが、身体の動きという表現媒体そのものに 着目したマース・カニングハム (Cunningham, Merce: 1919-2009)です。彼は20世紀前半の表現主 義ダンスが前提としていた、表現媒体である身体およ び動きとそれが喚起するイメージや情緒など意味内容 の関係を見なおした上で切り離し、「動きのための動 き」を現前化させました。私が特に興味を抱いたの は、カニングハムの「静穏」・「エネルギー」・ 「自由性」等のキー・ワードを核とする身体理論で あり、そこに通底する禅を中心とする東洋思想の影 響でした。(『マース・カニングハムの舞踊におけ る静 (stillness) の展開』と題する学位論文では、 カニングハムの身体理論を東洋思想の影響という観 点から解釈することを試みています)。 カニングハ ムによると、ダンサーである演者の心と身体が一体 化し、自己という意識が消えた「無心」の状態に 至ったときにはじめて真の「自由 (the possible gift of freedom)」を得ることができます。意味や その他の社会的記号から心身を解放することこそ が、彼が目指した方向でした。そしてカニングハム の身体に対するこのような考え方は、劇場ダンスに 大きな影響を及ぼし、コンテンポラリー・ダンスに 引き継がれています。

現在の学習指導要領においても、「からだほぐし」における「自分の体の状態への気付き」という身体の内的感覚を研ぎ澄ます方向が示されています。ポスト表現主義的ダンスが半世紀以上培ってきた身体への知見も劇場ダンスの枠にのみ留めるのではなく、戦後日本のダンス教育の中核となってきた表現・創作ダンスの領域において活かしていく方法を一層探究していくべきではないかと感じています。これをダンス教育の課題として理論・実践の両面から検討することが、現在の私の大きな研究の柱となっています。

2. 「言 語 と し て の ダ ン ス (Language of Dance)」、ダンス分析法の研究

大学でルドルフ・ラバンの舞踊記譜法であるラバノーテーション (Labanotation) を学び、身体の動きを記号として可視化できることに衝撃を受けました。これを契機に、大学院ではスーザン・レイ・フォスターが著書Reading Dancing(1986)で展開した記号学的アプローチによる舞踊分析理論を修士論文の研究テーマとして取り組む一方で、ラバンの動き

の分析法 (LMA: Laban Movement Analysis) につい て学びました。その後、ラバン理論から派生したも う一つの知的枠組みであるLOD (Language of Dance) を学ぶ機会を得ました。LODは人間の身体運 動に共通する根幹的要素を抽出し、「動詞」「副 詞」「名詞」等に分類・体系化した動きのアルファ ベットと呼ばれる身体言語です。ラバノーテーショ ンと類似した記号を用いますが、ラバノーテーショ ンが「動きの記録」に重きをおく一方で、LODはより 実践的に現場で使えるように記号を簡略化するなど の工夫が行われ、「動きの創造」の手段として考案 されている点が大きく異なります。LODが優れている のは、LODがダンスのみならず身体運動全てを説明し 得る語彙体系となっているため、バレエなど特定の ダンスの型やスタイルから解放される点です。言語 を学ぶように少しずつ動きの要素(16の主要動作 prime action)を学び、それらを語句、それから文 章というようにつなぎ合わせていくことができるよ うにします。LODの教科書はYour Moveという題がつ いていますが、まさに個々人の動きを導くことに重 きが置かれています。

私はLODの国際指導者資格を2005年に取得し、LODの教育現場での実践を2011年より岡山大学教育学部附属中学校、および岡山市立操山中学校において行っています。これまで「現代的なリズムのダンス」の学習内容として、LODのアルファベットの一つである「跳ぶ(spring)」を構成する五つの足の型を採り入れた実践を試みてきました。試験的実践を経た実感としては、LODは上記で触れたポスト表現主義的な「身体であそぶ」ということを実現するための一つの方法として優れた可能性を有しているのではないかということです。もちろん、どの身体語彙をどのような順番で、どのように…等々教育現場で実際に使えるものにするためには、解決しなければならないことが山積みです。今後焦らずに、一つ一つ取り組んでいきたいと思っています。

第65回舞踊学会大会

期日 2013年(平成25年)12月7日(十)8日(日)

主催 舞踊学会

後援 愛知県教育委員会

会場 愛知芸術文化センター

共催 愛知芸術文化センター

■大会全体スケジュール

12月7日 (土)	12月8日(日)
9:30 〜受付 12階ロビー 10:00〜12:00 アートスペース 一般研究発表 (2会場 A, E·F)	9:30 〜受付 12階ロビー 10:00〜12:00 アートスペース 一般研究発表 (2会場 A, E·F)
13:00~14:30 昼食 (理事会)	12:00~13:00 昼食
※14:00~は小ホール前でも受付をいたします。 14:30~ 小ホール 「ダンスの公開ワークショップ&ショーイング」 司会・進行/和光理奈(中京大学) ●アウトリーチ・プログラムのショーイング 山田うん振付作品 ダンス:愛知県内小・中学校、高等学校教員等 11月9日、16日に行ったワークショップのショーイング ジェコ・シオンポ振付作品 ダンス:至学館高等学校ダンス部 あいちトリエンナーレ参加振付家のジェコ・シオンポが高校ダンス部へ振り付けたダンス作品のショーイング	※12:30~は小ホール前でも受付をいたします。 13:00~ 小ホール シンポジウム 「劇場におけるアウトリーチ ~ダンス・プログラムの可能性~」 司会・コーディネーター/ 唐津絵理(愛知芸術文化センター) ●基調報告 柴田英杞((公社) 全国公立文化施設協会アドバイザー) 「劇場と実演芸術家の創造環境はどう変わるのか? ~劇場法及びその指針の制定を受けて~」 高橋和子(横浜国立大学教授・舞踊教育学) 「学校教育におけるダンスの歴史的変遷と教育的価値」 横堀ふみ(DANCE BOXプログラム・ディレクター) 「国内事例 DANCE BOXにおけるダンスのアウトリーチ」 あべあか音(ダンサー・振付家) 「海外事例 The Placeにおけるアウトリーチ・プログラ
	ムー社会におけるコンテンポラリーダンスの役割と可能性を探るー」 ●パネル・ディスカッション 「劇場におけるアウトリーチ ~ダンス・プログラムの可能性」
17:00~18:00 総会 18:30~20:00 懇親会 Octo Cafe 東桜店 地元ダンサーによるダンスパフォーマンス	

【企画の趣旨】「劇場におけるアウトリーチ~ダンス・プログラムの可能性~」

平成24年6月に施行された「劇場法」により、「劇場と学校教育」との連携等、劇場の担う役割はますま す多様化している。一方、新しい「中学校学習指導要領」が平成24年4月から完全実施となり、中学1,2年次の男女が共にダンスを必修で学習することとなったが、現場の教師からはダンスをどのように指導すればよいか等の不安の声も聞こえてきている。そこで、劇場との共催で開催する第65回の舞踊学会大会では、「劇場におけるアウトリーチ~ダンス・プログラムの可能性~」をテーマとして掲げ、現状では実施度や認知度が高いとは言えないダンスに関わるアウトリーチ・プログラムの可能性を探ることとした。

本大会と愛知芸術文化センターとの共催により実施するダンスのアウトリーチ・プログラムの成果として は、振付家山田うん、ジェコ・シオンポによる舞踊作品を発表する。また、ダンスワークショップ&レクチャーとして、「体育の授業に生かすダンス・ワークショップ」も公開する。シンポジウムでは、国内外のパネリストを招聘し、芸術家、劇場関係者、教育者それぞれの見地からディスカッションを深めていく。

これらの大会企画を通して、劇場におけるダンスのアウトリーチ・プログラムの可能性について、参加者と共に双方向で考えていくことを本大会の学会テーマとする。

事務局便り

1. 会費納入に関して

現在事務局では、会員の皆様に向けて過去5年にさかのぼって会費の納入状況をお知らせするとともに、未納分の精算をしていただいております。おかげさまで順調に会費納入率がアップしている状況です。学会の活動は会員の皆様から納入いただいた会費で運営しております。ご理解、ご協力の程、どうぞ宜しくお願い致します。また、会費納入につきましてご不明な点がありましたら事務局までご連絡ください。

上記に伴い、6年以上未納の会員の方々、また長期にわたって郵便物が宛先不明で返却されている方々につきましては、理事会の承認を経て除名という形を取らせていただいております。舞踊学会からのお手紙やご案内がお手元に届いていない方々は、除名の対象となっている可能性がございますので、下記事務局までお問い合わせください。

2. 会員名簿作成に関して

今年度、事務局では会員名簿を作成しますので、名簿に掲載する情報を会員のみなさまにお送りいただく必要があります。まだ提出されていない方は、ご協力お願いいたします。

なお、理事会で名簿のあり方について審議し、今回は紙媒体ではなく、HP上に掲載するデータ名簿とすることに決まりました。会員はパスワードを用いて名簿を閲覧できることになります。

- (A)情報を確実かつ迅速に処理するため、お手数をおかけしますが会員情報は以下の2つの方法で事務局にお送り下さい。
 - ①会費納入のご案内をお送りした際に同封したハガキ
 - ②メール: danceresearch.info@kagoya.net 舞踊学会事務局

メールでのご回答は、下記の★名簿の原簿となる9項目すべてをご記入(形式は任意)のうえ、

HP上に掲載を希望しない項目について×印をつけて下さい。

参照:ハガキにある×印の記入方法。

注:ハガキとメールの内容が異なる場合、ハガキの情報を優先します。

(B)事務局にお送りいただく調査項目は下記の9項目です。

①氏名 ②所属

③住所(自宅)

④住所(勤務先)

⑤電話/FAX(自宅)

⑥電話/FAX(勤務先)

⑦メールアドレス(自宅) ⑧メールアドレス(勤務先) ⑨専門領域

※以上の全項目は、「原簿」として、事務局内のみで管理します。

※HP上に掲載する項目については以下のようになります。

- ①氏名、所属、専門領域は必掲。
- ②自宅/勤務先の住所、電話/FAX、メールアドレスについては、掲載を希望しない項目は掲載しない。 但し、自宅住所、電話/FAX、メールアドレス、勤務先住所、電話/FAX、メールアドレスのいずれかの一つは 必ず掲載するものとする。

舞踊学会事務局 〒157-8565 東京都世田谷区北烏山8-19-1 日本女子体育女子大学 松澤研究室

Tel&Fax: 03-3300-2423 danceresearch.info@kagoya.net

揭示板

◎舞踊学会ニューズレターが国立国会図書館のオンライン資料収集制度のアーカイヴ対象となりました。

改正国立国会図書館法に基づき、平成25年7月25日より国立国会図書館がインターネット上で公開される電子情 報で図書または逐次刊行物に相当するもの(オンライン資料)が収集・保存されることになりました。舞踊学会 の発行の本ニューズレターもアーカイヴ対象となり、創刊号より継続的に収められることになりました。

◎邦正美記念室公開のお知らせ

2007年に亡くなった邦正美の記念室が2013年12月より公開されます。公開されるのは書籍、写真集、 作品のDVDをはじめ、衣装、伴奏者のノート、本の原稿、更にメリー・ヴィグマンやラバンの手紙等。

開室は日曜・祭日のみ。午後1時~5時。料金500円。予約制

一般財団法人 邦正美創作舞踊研究所 〒157-0073 東京都世田谷区砧7-6-3

Tel 03-3417-1331 Fax 03-3417-5927 E-mail kunibuyo@dolphin.ocn.ne.jp

◎宮城県東松島市・石巻市での身体表現ワークショップのご案内 ~「身体的共創」から「社会的共創」へ~

東松島市と石巻市で、年齢や性別、障がいやダンス経験の有無などが多様な人たちによる身体表現ワークショップを定期 的に実施しています。関心のある方は、ぜひ一度足をお運びください。

HP http://teawasekaken.jp/ 表現未来の会代表 西 洋子(東洋英和女学院大学)

日程(4月以降も継続予定)

参加申込先 高橋うらら(東京都市大学) urarat@tcu.ac.jp

2013年 ・12月22日(日)10:00-12:00 東松島市内 ・12月23日(月・祝)10:30-12:30 石巻市総合体育館武道場

2014年 •2月8日(十)14:00-15:30 石巻市内

•2月9日(日)10:00-12:00 東松島市内

·3月21日(金·祝)14:00-15:30 石巻市内 ·3月22日(土)10:00-12:00 東松島市内

【編集後記】

有能でチャーミングな編集委員に恵まれてアッという間に第5号です。いろいろとご意見お寄せください。 反応するように努力いたします。 (大貫秀明)

ニューズレターも5号を数え、このたび公的なアーカイブにも登録される運びとなりました。身の引き締ま る思いです。これを機にさらに充実した紙面づくりを目指して頑張ります。(森立子)

西形先生のインタビューでは、森先生と仙田さんに助けられながら、素晴らしいお話を伺えましたことに感 謝しております。これから、どうぞよろしくお願いいたします。(弓削田綾乃)

より読みやすいNL編集を目指します。(高橋系子)

ニューズレター第5号

発行日: 2013年11月29日

編 集:大貫秀明 森立子 弓削田綾乃 高橋系子

仙田麻菜 (編集補助)

発行者:舞踊学会(会長:柴眞理子)

ご意見、ご感想、掲示板への投稿希望は以下のア ドレスまでお願いいたします。

ニューズレター編集委員会

danceresearch.newsletter@kagoya.net